

主 題：主がともにいてくださるなら

聖書箇所：詩篇 46篇

テーマ：困難に直面する中、私たちに確信を与えてくれる真理とはどのようなものか？

今朝、皆さんと一緒に見ていきたいのは、詩篇46篇のみことばです。内容に入る前に、まずはいつものようにみことば全体をお読みします。

詩篇46篇 指揮者のために。コラの子たちによる。アラモテに合わせて。歌

「:1 神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。:2 それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。:3 たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。セラ :4 川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。:5 神はそのままなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。:6 国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。神が御声を発せられると、地は溶けた。:7 万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ :8 来て、【主】のみわざを見よ。主は地に荒廃をもたらされた。:9 主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。:10 「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」:11 万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ」

●マルティン・ルター

今から約500年前となる1527年。この年はマルティン・ルターの生涯において最も困難な年となりました。宗教改革の発端となった“95ヶ条の論題”を教会の門に打ちつけてから、10年の月日がたったこの年の4月、彼は説教の途中で突如めまいに襲われ、説教を続けられなくなります。また、それから3カ月後の7月には、彼は友人との食事中に激しい耳鳴りに襲われ、倒れてしまうのです。この時、ルターを診断した医師は、彼のいのちが終わりに近づいていることを感じていました。そして悲しいことに、彼の健康状態はここからさらに悪化していき、心臓の問題や深刻な腸の合併症に苦しむこととなります。また、そんな肉体的な苦痛を味わい続けた彼は、次第に大きな落胆を心に覚え、精神的にもひどく落ち込むようになるのです。ある時、この苦しみに関して、ルター自身が友人に送った手紙の中で、こんなことばをつづっていました。「私は一週間以上にわたり、死と地獄を行ったり来たりしている。全身が打ちのめされたように痛み、手足は今も震えている。絶望、神に対する冒瀆の波と嵐の中で苦闘し、私はキリストを完全に失いかけてしまった。」と。

また、これだけではありません。加えて、この年には黒死病と呼ばれる感染症がドイツで大流行していました。多くの者がそれによっていのちを落とし、たくさんの人たちが大きな恐れや不安を抱いて、町から逃げて行ったのです。しかし、ルターと彼の妻であったカタリナは、病人や死にかけの者を放っておくことはできないと町にとどまり、自宅を開放して、彼らの世話をしました。こうして彼の家は病院へと変わりました。そして辛くも彼は、そこで多くの友人たちが死んでいく姿を見守ることになりました。また、この時、彼の幼い息子も重い病気を患って、危うく死にかけてしまうという悲劇をも味わうことになるのです。言うまでもなく、ルターは想像もできないほどの痛みや悲しみを経験していました。神様に大いに用いられていたすばらしい信仰者も、余りにもひどい状況を前にして絶望を覚えました。まるで四方八方苦しみと死に取り囲まれたかのような真っ暗闇の中に彼は置かれていたのです。

しかし、ルターはそんな中で、神様のことば、ある詩篇のうちに大きな慰めと励まし、揺るがぬ希望を見出すこととなります。その詩篇こそ、私たちがきょう見ていく、この詩篇46篇だったのです。そしてご存じの方もおられるでしょう。苦しむルターはこの詩篇を元にして一つの讚美歌を書き記しました。

それが今でも変わらずに歌われている讃美歌“神はわがやぐら”でした。そんな曲の1番の歌詞には確信に満ちた彼のことがこんなふうに綴られています。苦しみの中にいた彼はこう歌ったのです。「神はわがやぐら わが強き盾 苦しめる時の 近き助けぞ、おのが力 おのが知恵を 頼みとせる 陰府の長も など恐るべき」(讃美歌267)と。すごいことばだと思いませんか？だれがどう考えたとしても絶望的に思える状況に置かれた人物の心は、ただ神様とのみことばによって大きな励ましを受けていたのです。ではここで、ルターはいったいどんな希望を、どんな確信を、この詩篇のうちに見出していたのでしょうか？そのことを考えてみたいと思います。

特にこの詩篇46篇には、今の私たち自身にも当てはまる、今の私たち自身も覚えることのできる、困難の中で確信を与えてくれる三つの真理が挙げられています。もしかしたら、皆さんの中にも、今まさに手に負えないような困難や痛みを覚えている人もいるかもしれません。また、この先にもさまざまな試練や難しさに直面して、失意や苦しみを覚えることもあるでしょう。でも、そんな時こそ、きょう学ぶこのみことばの真理を思い返してみてください。ルターがそうであったように、私たちもどんな時も神様とみことばに同じ揺るがぬ希望と確信を、励ましを見出すことができます。ではいったいそれはどんな真理だったのか、実際に考えてみましょう。

〇ともにいてくださる主：困難の中で確信を与えてくれる三つの真理

1. 主は偉大なご性質を持ったお方 1-3節

まず一つ目の真理が1-3節に記されていました。一つ目の真理は、私たちの主は偉大なご性質を持ったお方だということです。

▶「避け所」

1節から見てみると、著者の確信に満ちたこんなことばで始まっていました。「神はわれらの避け所、また力」、ここで二つのことばが神様に対して用いられていました。一つ目に神様は「避け所」なのだと言われていたのです。このことばには、文字どおり「避難所」とか「シェルター」といった意味が含まれています。また、特にこのことばは聖書の中で、嵐や戦い、手に負えない何かしらの問題が生じた時、人々が逃げ込むことのできる安全な場所を表します。まるで敵に追われた兵士が、城壁に囲まれた自分自身の城へと逃げ込んで行けば、もう傷つけられる心配がないように、著者はほかのだれでもない神様こそ、私たちがいつでも逃げ込むことのできる最も安心で、最も安全な場所だと言うのです。

▶「力」

また加えて二つ目に、神様は「力」だとも言われていました。この「力」ということばは、そのものが持つ強さや力強さというものをそのまま意味します。でも特に神様に対して用いられれば、これは弱者や助けを必要とする者に与えられる神様の圧倒的な力を表していました。例えば同じことばは、追い迫っていたパロの軍勢から助け出された直後、モーセとイスラエルの民が歌った賛美の初めにも出てきていました。出エジプト記15：1-2に「:1 ……【主】に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。:2 主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。この方こそ、わが神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」と記されています。ですから、「避け所」であられるその神様というのは、どんな時でも最高の守りを与えてくださるお方でした。

▶「助け」

でも、それだけではありません。同じ神様は、手に負えないような最悪の状況に陥った者を助け、励まして、そこから引き上げることのできる力を持ったお方でもあったのです。詩篇の著者は、もう一つだけ重要なことばをつけ足していました。1節に「苦しむとき、そこにある助け」と続いています。もちろん、これでも意味はわかりませんが、この部分をもとのことばどおりに訳すとこんなふうに言うことができます。「彼は苦しみの中で、豊かに見出される助け」、「彼は苦しみの中であふれんばかり見出される助け」

と。言いかえれば、神様は苦しみの中でこそ十二分に必要な「助け」を豊かに与えることのできるお方だということです。私たちが神様に助けを求めていこうとする時に、そこに神様がいない、神様を見出すことができない、そんなことは決してないのだ、神様の「助け」に不足や限界、そんなものは決してないと言うのです。

そしてこれは私たちにとって、大きな慰めだと思いませんか？なぜなら先ほど私たちは神様が「避け所」であり「力」であると見たのです。でも、もし私たちの「避け所」であり「力」である神様が、実際に苦しんでいる時に、私たちのそばにいてくださらなかつたらどうでしょう？私たちから遠く離れて、神様が、いや、今は忙しいので手が離せません、あなたが深い悲しみにいることはわかっているけれども、今はあなたを助けることができませんと、もし言われるのであれば、いかに神様が「避け所」であって、「力」であったとしても、私たちは大きな不安や戸惑いを覚えるでしょう。でもみことばは、そんなことは決してありませんと言うのです。「避け所」であって、「力」である神様は、困難の中にある時にこそ豊かに見出すことができると。痛みや苦しみを味わう時に、自分には何もできないような絶望的な状況にある時に、そこにこそ大いに見出すことができると。聖書注解者のひとり、アレン・ロスもこの「助け」ということばに関して、こんな説明を加えていました。「現代の読者は、助け手を地位の低い人や重要な人物の補佐役のように考える傾向があったりします。しかし、この詩篇が主を助け手として描いているのには、遥かに深い意味があります。基本的に、この言葉は、誰かが欠いているものを与えること、またはその人自身にはできないことをしてあげてくれることを指しているのです。」と。できないことをしてくれるお方だということです。これが私たちの神様でした。私たちの神様は、どんな時も逃げ込むことのできる最高の守り、「避け所」であるだけでなく、どんな時も弱い者を支えてくれる、圧倒的な「力」があるだけでなく、何よりもいつでもそばにいて、私たちが最も必要とする時に、最も必要な「助け」を与えることのできるお方なのだというのです。神様こそ私たち自身にはできないことを容易になすことのできるお方なのだというのです。

そしてそれゆえに、詩篇の著者は2節で「それゆえ、われらは恐れぬ。」と、大胆に口にしていました。自分たちのうちに何かがあったからではありません。ただ、神様が偉大なご性質を持ったお方であることを覚えたからこそ、それがその人のうちから恐れというものを取り除いていました。主の姿を正しく心に留めることが、力強い平安と確信をその人のうちにもたらしていたのです。そしてすごいのは、そんな神様にあるその確信は、ほんの些細な問題の時だけに働くものではありません。たとえ仮に、人に最も恐れを抱かせるような最悪の状況に置かれたとしても、それは変わらずその人を支え続け、揺るがぬ力となるものでした。どういうことかと言うと、続きにこのように記されていきます。2b-3節にかけて「たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。:3 たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。」と書いてあります。読んで気づいたと思います。詩篇の著者は、ここで自然界を引き合いに出して、恐ろしい描写をしていました。普段であれば、絶対に揺り動かされることのないようなもの、地であったり、山であったり、海であったり。そういったものを挙げて、それらが壊滅的な状況に陥っている様子をここに描いていたのです。例えば、そびえ立つ山々を思い浮かべてみてください。聖書の中でも、山は動くことのない、最も安全なものとして扱われています。私たちも遥か高くそびえている山々を見れば、その壮大さや力強さを覚えるのです。そのような山の偉大さを見て、この山は絶対に動くことがないと私たちも思うのです。でも、もしそんな山が目の前で揺れ動き、すべて崩れ去って、海の中に落ちていくようなことがあったとすれば、恐れを抱いてもおかしくないでしょう。また山だけではありません。普段は静かでおとなしい海が、目の前で荒れ狂って、水かさがどんどん増していった、巨大な津波が押し寄せて来るようなことがあったとすれば、圧倒的な自然の力の前で、文字どおり私たちは無力であるからこそ恐れを抱いてもおかしくないでしょう。些細な問題ではありません。決して揺り動くことのないものだと、多くの人たちが信じているようなものが、すべて跡形もなく崩れ去り、人

の手には負えないような大問題が降りかかり、すべてのものが制御不能で、大変な混乱が生じるのです。激しく心が騒いで、不安や失望を覚えていたとしてもおかしくない状況でした。でも、そんな状況を引き合いに出して、詩篇の著者は言うのです。「たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動い」たとしても、「われらは恐れない」と。「避け所」であって、「力」であって、苦しむ時の「助け」である神様がともにいてくださるのだとすれば、最も困難な時でさえ大丈夫だと。そうやって揺るがぬ希望を見出すことができるというのです。

少し考えてみてください。果たして今の私たちは、同じような確信を神様に対して持っているでしょうか？どんな時も必要な助けというのは、変わらない神さまから来ると信じて歩んでいるでしょうか？果たして私たちは、みことばが描いている神様の姿を覚えて、その神様に確信を置いているでしょうか？時に私たちは、知らず知らずのうちに神様以外のものに信頼を置いていることがあります。ある人は自分のお金や財産を頼りにしているかもしれません。ある人は自分自身の健康や、自分自身の周りの友達や家族かもしれません。また、ある人はさまざまな最新の技術や専門家の意見に確信を置いているかもしれません。でもそうして変わってしまうものに頼って歩んでいるからこそ、信頼していたものが全く役に立たないような困難に直面する時、私たちはすぐに土台を失って、恐れを覚え、喜びや希望を失ってしまうのです。どうでしょう？私たちは今、変わってしまうものに希望を見出しているでしょうか？それとも決して変わることはない神様のうちに自分自身の確信を見出しているでしょうか？

かつてふたりの夫を、それぞれ福音伝道のための殉教とガンによって失うという、ひどい苦しみを味わったエリザベス・エリオットもこんなことばを残していました。自分の過去のつらい体験を振り返った彼女は、この詩篇に触れて、こんなことばを口にしたのです。「(最初の死の衝撃で)最も頼りになると思われていた全てのものが崩れ去ってしまいました。山々は崩れ落ち、地が揺れ動いています。そんな時、全てのものが揺らいているように見えても、ただ一つだけ揺らぐことのないものがあると知っているのは深い慰めです。神は揺るぐことはありません。」と。忘れてはいけません。私たちの神様のような方はほかにはいないということです。たとえすべてのものが変わってしまったとしても、この方だけは変わることはありません。

別のみことばもはっきりとこのように述べていました。詩篇102:25-27に「:25 あなたははるか以前に地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。:26 これらのものは滅びるでしょう。しかし、あなたはながらえられます。すべてのものは衣のようにすり切れれます。あなたが着物のように取り替えられると、それらは変わってしまいます。:27 しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。」とあります。私たちの神様こそ、どんな時も変わらずにいてくださる「避け所」であり、「力」であり、「助け」です。決して変わらないお方であるからこそ、私たちはいつも必要な励ましをその方のうちに見出し続けることができます。また、何より苦しむ時にこそ、豊かに助けを見出すことのできる、その方において、私たちは確信を持って歩いていくことができるというのです。そして、私たちがこんな偉大な神様の姿を覚えるのであれば、「それゆえ、私たちは恐れない」と大胆に口にすることができるのです。

2. 主はいつもともにいてくださるお方 4-7節

次に、二つ目の真理が、続く4-7節に記されていました。それは、私たちの主はいつもともにいてくださるお方だということです。4節はこのように続いていました。「:4 川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。:5 神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。」と。これを読んですぐに気づいたと思います。先ほど見た3節とは印象が大きく変わっていました。3節では水が立ち騒ぎ、荒れ狂った波が大きな混乱や恐れをもたらしていました。でも、4節では穏やかな川が流れ、その流れが神の都であるエルサレムに喜びをもたらす様子が描かれていたのです。3節と4節に対比を見て取ることができました。

▶「川」

4節の最初に出てきている「川がある」の「川」ということばが実際に何を表しているのかは、注解者の中にいろいろな考えがあります。ある人たちはこれをかつてのギホン川ではないかと考えて、文字どおりこの「川」が町を潤していたのではないかと考えています。また、ある人たちは神様の恵みや神様の祝福、そういったものがまるで川のように神の民のうちに注ぎ込まれる様子を例えているのではないかと考えています。ただいずれにせよ、この箇所が描いていることは明白でした。それはこの時の都というのは、まさに大きな喜びや祝福にあふれていたのです。何かに脅かされることもなければ、そこに不安や恐れというものはありませんでした。神の民のうちには確かな平安が、確かな穏やかさというものが存在していたのです。さっきとは打って変わって、そこには静けさがありました。

いったいどうしてでしょう？なぜ神の都はそんな穏やかさや平安に満ちあふれていたのでしょうか？その答えが5節にはっきりと書かれていました。「神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない」とありました。つまり、都を取り囲んでいた城壁の頑丈さのゆえでも、都が抱えていた軍の強さでもありませんでした。ただ、ほかのだれでもない神様が、彼らのまなかにおられたからこそ、いと高き方の臨在が神の民のうちに大きな慰めを、大きな安心を、静けさというものをもたらしていたのです。

▶「夜明け前」

また、ここで詩篇の著者は、再びそんなすばらしい神様にある助けを強調していました。5節の後半に「神は夜明け前にこれを助けられる。」と言われていました。ここに「夜明け前に」ということばが使われていました。これも詩的な表現ですけれども、これにも対比のイメージがなされています。要するに、夜、暗闇の後、朝には輝かしい日が昇ってくるのです。それと同じように、神様は神の民が苦しみを経験していたとしても、そこからの助けを必ず与えてくださるのだというのです。時に、置かれた苦難は確かに難しく、先の見えない真っ暗闇に思えたとしても、いつまでもその中に放っておかれることはない、助け出してくださいと神様のあわれみのゆえに、その神様にあつて希望を見出すことができるというのです。思い返せば預言者エレミヤも、まさにそんな主の恵みに拠り頼んでいた人物でした。自分の目の前で崩壊していくエルサレムの町を目の当たりにしながら、彼は間違いなく大きな悲しみを味わっていました。それでもそんな彼がこんなことばを残していたのです。哀歌3：22-24に「:22 私たちが滅びうせなかったのは、【主】の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。:23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。:24 【主】こそ、私の受ける分です」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」と書かれていました。苦難の中で、エレミヤが期待して待ち望み続けていたものは、置かれた状況の改善ではありませんでした。知恵や力が与えられることでもなければ、この世の富や権威でもありませんでした。彼はただ主を待ち望んでいたのです。いつも恵み深く、そのあわれみは決して尽きることのない、そんな力強い神様に、エレミヤは信頼を置き続けていたのです。まるで暗い夜の後は明るい朝がやって来ようように、どんな状況からも助けを与えることのできる主がともにいてくださること、それは神の民にとって、何よりも揺るがない喜びと平安をもたらすものでした。

そして、そんな偉大な神様の姿を覚えながら、詩篇の著者は6節からもこんなふうにつづけます。6-7節にこう書いてありました。「:6 国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいた。神が御声を発せられると、地は溶けた。:7 万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。」と。この箇所、著者は3節で自然界に用いていた同じことばを、敵対する国々に当てはめていました。3節と6節を比べながら見ると、水が、3節では「立ち騒ぐ」ように、6節では「国々は立ち騒ぎ」いでいました。3節では「山々が揺らぐ」ように、6節では「王国は揺らいで」いました。言い換えれば、巨大な力を持つ国や王国が立ち上がり、神の民に向かって、今にも民に大きな痛みや苦しみをもたらそうとしていたということです。民自身の手には負えないような大変大きな危険がそこまで迫っていました。大きな恐れをもたらそうとするようなものが迫っていたのです。しかし、その時にあることが起こりました。6節に、民とともにおられるその「神が御声を発」したのです。ことばを口にしました。すると敵は、みんな瞬く間に溶け、

滅び去ってしまいました。すごいと思いませんか？力ある神様の前では、どんなに力強い国々も立っていることなどできませんでした。どんな敵も、どんな策略も、どんなに厳しい状況も、力ある神様の前には何の問題にもなりません。いや、それ以上にこの神様がそれらのものを滅ぼすために用いていたのはただ一つ、ご自分の御声を発すること、ことばを使うこと、それだけだったのです。いったいどんなにこの神様は力あるお方なのでしょう？どれほどまでに圧倒的な力を持っているお方なのでしょう？

そして感謝なのは、そんな万軍の主こそが、私たちのまなかにくたさる、私たちとともにいてくださるお方だということです。どんな時も必要な助けを与えることのできる者である神様、私たちはこの方のうちに十分な守りを、揺るがない安心を常に見出すことができるのです。それが私たちとともにいてくださる神様でした。だとすれば、私たちは普段いったいどこに助けを見出そうとしているのでしょうか？困難な状況に陥るような時、いったいだれに喜びや慰めを求めようとしているのでしょうか？改めて考えてみてください。私たちの周りには、私たちの手には負えないような問題が数え切れないくらいあります。私たち自身の生活の中にも、私たちには到底理解できないような状況が数え切れないほどあります。でも私たちの神様には手に負えない問題も、理解できない状況も、ただの一つとしてありません。すべてのことが神様の御手の中で起こっていて、すべてのことを神様はご自分の思いのままに働かせることができるのです。そしてその神様がどんな時にも一緒にいてくださるのだとするならば、私たちはほかに何を望むでしょうか？私たちの主はいつもともにいてくださるお方、これが困難の中で確信を与えてくれる二つ目の真理でした。

3. 主はすべてを支配しておられるお方 8-11節

そして、最後にもう一つ、困難の中で確信を与えてくれる三つ目の真理は、私たちの主はすべてを支配しておられるお方だということです。改めて8節から見ると、こんなことばで始まっていました。「来て、【主】のみわざを見よ。」と。詩篇の著者は、こうしてすべての人々に対してここで呼びかけていました。「見よ」ということばが使われていますけれども、このことばは単に「横目でちらっと見る」、そのようなものではありません。このことばには何かを「観察する」とか、「凝視する」といった意味が含まれていました。たとえ何があったとしても、うっかり見落とすようなことはないように、著者は人々に対して主のみわざをじっくりと観察するように、じっくりと目を留めるようにと求めていたのです。そして、彼らが目を留めるその主のみわざというのは、確かに圧倒的で、また圧巻なものでした。8節の続きにこのように記されています。「主は地に荒廃をもたらされた。：9 主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。」と。すごい光景だと思いませんか？この力ある主の前に立っていることのできた者はだれひとりとしていませんでした。すべてを支配しておられる主権者の御手を差し押さえて、そのみわざを止めることのできる者は、ひとりとしていませんでした。弓も、槍も、戦車も、この世でどんなに強靱に思える敵であったとしても、主はそれらのものを容易に蹴散らし、戦いをやめさせることのできる圧倒的な力を持ったお方だったのです。すべての支配者でした。かつて理性を取り戻した後の、あのネブカデネザル王も、その主の姿を正確にこう描いていました。ダニエル書の中で彼はこんなふうに賛美しています。ダニエル4：34-35に「：34 ……その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。：35 地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押さえて、「あなたは何をされるのか」と言う者もない。」と記されてきました。それだけ偉大なお方でした。

そして、そんな偉大なお方の姿に目を留めた者たちに向かって、今度は著者ではなく、主ご自身がはっきりと語られるのです。10節に「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」と書いてありました。「やめよ」、そう神様は言われていました。このことばには、もともと「座る」とか「手を下す」といった意味が含まれています。ここから、パニックに陥るのではなく、椅子に腰をかけて落ち着いている様子や、今までやってきたことの手を止めてやめる様子を表す

のに用いられます。ですから、ここで求められていたことは明白でした。神様の偉大な姿に、神様の力強い姿に目を留めたのであれば、その力強さというものに気づいたのであれば、ただその神様の前に黙って、謙ることでした。いろいろな不安や恐れを口にするではありません。置かれた状況に圧倒されて信頼を失ってしまうのでもありません。また間違っても、神様に逆らう態度をとるのでもありません。私たちはただこの偉大な力ある神様を信頼して、従順に従っていかうとするのです。

偉大な神様の姿を見た時に、私たちの取るべき応答は、そのすばらしさに驚嘆し、そのすばらしい力のうちに平安を見出し、そしてそのすばらしい神様のうちに従順に歩いていくことでした。忘れてはいけません。私たちは、神でも主権者でもありません。私たちはただの被造物です。弱く、助けをいつも必要としているものです。でも私たちを造った神様は、すべてを思いのままにすることのできる主権者であり、支配者だということです。この神様こそ、すべてのものから崇められ、ほめたたえられる栄光にあふれた勝利者なのだと言うのです。そして感謝なのは、こんなにもすばらしい神様が、私たちにとって関係のない、遠く離れたお方ではないということです。イエス・キリストを信じる信仰によって救われた者たちにとって、この神様こそ「アバ、父」と呼ぶことのできる存在であって、どんな時もともにいてくださるお方なのだと言うのです。だからこそ詩篇の著者も、最後にこのようなことばで締めくくっていました。11節はこうまとめられています。「万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりである。」と。

愛する皆さん、果たして困難の中で私たちはどこに希望を見出そうとしているでしょう。悲しいことに、私たちは日々の生活の中であって、本当にさまざまな難しさを覚えます。そこには重い病気があったり、からだの痛みがあったりします。仕事や子育て、そういったものにおいて葛藤を覚えることもあります。私たちみなが罪人であるからこそ、私たちは互いに罪を犯し、傷つけ合ってしまうこともあります。自分の手には負えないような問題、自分には到底理解できないような問題もあれば、恐れや絶望を容易に抱いてもおかしくないような苦しみに直面することもあります。でも、皆さん、それでもなお私たちには万軍の主がともにいてくださるということです。避け所であり、力であり、苦しみの時の助けである神様が、どんな時も必要な助けを、必要な励ましを与えてくださるということです。私たちはただ、この方の中であって、十分な慰めを、豊かな満足は今も見出すことができるということです。そしてこの神様がともにいてくださるのであれば、私たちも静まって恐れることはない。その感謝を持って、神様に信頼して歩いて行くことができるということです。

最初に見たマルティン・ルター、彼は間違いなくその生涯において、大きな苦しみと痛みを味わって、絶望を覚えることもありました。しかし、そんな彼が亡くなる直前、こんなことばを残していました。彼は、こう口にしています。「我らの神は救いをもたらす神であり、我らが死から逃れるのは神である主による。」と。こうしてひどい困難を味わった彼も、最後の最後まで力強いとりであって、苦しみの時の助けである神様に信頼を、確信を置いて歩み続けていました。その信仰はもちろん、自分自身の力によって支えられていたわけではありません。ただ、ともにいてくださる神様であって、揺るがされることはありませんでした。今の私たちも同じだということです。いつも私たちとともにいてくださるすべてを支配しておられる偉大な力ある神様、そんな方のうちに私たちも、どんな時も必要な慰めを、希望を見出し続けることができます。だからこそどんな時も、この神様に信頼して、そしてこの方のすばらしさをほめたたえる者として、今週もともに歩いて行きましょう。